

---

# 河童戦記～時姫の章～

万墨人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

河童戦記〜時姫の章〜

### 【Nコード】

N4247M

### 【作者名】

万墨人

### 【あらすじ】

『河童戦記』第一部。京の鴨川にある、信太屋敷を取り囲む軍勢！ 屋敷の主人、時姫は、信太家唯一人の跡取りで、陰陽師の血を継いでいた。時姫の家来、源二は、この危機に時姫を護って、京を脱出するのだったが……。

## 夜襲

かすかな物音に、源二は目を見開いた。がばりと寢床から跳ね上がるように起き上がると、全身を耳にして闇に気配を探る。

取り囲まれている。

起き上がったときには、枕元の太刀を掴んでいる。そろりと足音を忍ばせ、下男小屋のしとみ部戸を押し上げた。

松明の火明かりが源二の顔をあかあかと照らし出した。屋敷の正門あたりに、無数の明かりが揺れている。

真っ黒ななめ鞣し皮のような顔。半白の髪は源二の年令を表していたが、がっしりと白のような逞しい顎と、着物から覗く肌は、脂びかりするくらい若々しい。源二はぎょろりと目を見開き、歯をむき出して唸った。

百……いや、もうちよつと多いか。この屋敷を取り囲むには、仰々しいほどの人数である。

ゆつくりと後じさりすると、源二は手早く支度を始めた。太刀を帯にねじこみ、革の半袴を身につける。ちよつと考え、鎖帷子を身につける。すべてが終わると、土間に下りて草鞋の紐をぎゅつと締め上げた。

かねて用意のおい笈を背負うと、音がしないよう注意して引き戸を開け、外へ出た。背中に担いだ笈にはまさかの時のために食料、金子などが詰められている。

見上げると、下男小屋の屋根越しに月が出ていた。月夜の夜襲と

は、敵は戦いくさというものを知らぬ……。いや、そんなことも気にせぬほど焦っているのか。

足早に中庭を突っ切り、母屋へ向かった。

屋敷内はこの夜襲を知らぬように静まりかえっている。もともと、屋敷に住まうのは源二と、主人である時姫、それと使用人夫婦くらいのものだ。

夫婦は源二と同じように屋敷内の下男部屋に住んでいる。おそらく、この異変にも気付かず、高軒をかいて眠り込んでいるに違いない。

源二は母屋の濡れ縁に膝まづくと、そつと声を掛ける。

「姫さま……時姫さま……。お目覚めでございましょうか？」

源二か……と女の声がして、からりと雨戸が開かれた。はっ、と源二は頭を下げる。

「夜襲でございます。すでに屋敷は東西南北、すべて敵の手により取り囲まれております。すぐに脱出せねば、姫さまが虜になるのは必定」

そこまで言上して源二は顔を上げた。

あつ、と思わず声を上げてしまう。そこに、源二の主人である時姫が立っていた。

## 時姫

月明かりに浮かぶ卵形の顔。冷え冷えとするほど白い肌。切れ長の大きな瞳が、静かに源二を見つめている。

小さな唇と、細い顎のせいで年よりはかなり幼く見える顔立ちだが、その瞳は全体の印象を裏切っている。何ものも見透かすような瞳は、どこか年令を超越した叡智を宿すようで、源二は時姫の瞳に見つめられるたびなぜか落ち着きを失う自分を感じていた。

しかし、今の時姫は、源二がいつも見慣れた姿ではなかった。

粗末な小袖を身に着け、長い髪の毛は背中できゅっと絞って垂らしている。普段は内掛けを纏はっているのに、まるで京の町を歩く身分の低い婢女はしためのようであった。

時姫は源二の驚く顔を見て楽しむように笑顔を見せた。ちょっと小袖を引っぱると、小首をかしげる。

「どう？ 似合いますか？」

「そ、そのお姿は」

「かねて、このようなことがあると予感しておりましたので、この前、求めておきました。いつもの姿では、逃げ出すこともできませんでしょう？ それに、この着物、とても動きやすくて妾めかけは好きですよ」

源二は「敵わぬ」と首を振った。姫さまはなんでも承知いたしておるわい……。

懷から女物の草鞋を取り出すと、時姫の足もとに膝まづいた。

「これをお召しになつてくだされ」

ありがとう、と礼を言つて時姫は足を差し出した。源二は手早く時姫の足に草鞋を履かせると立ち上がる。

「それでは、出かけましょう。抜け口は用意しておりますので」

はい、と時姫は素直にうなずいた。

## 井戸

ここは京の都の鴨川ぞいにある信太從三位屋敷である。信太家は、古い陰陽師の家柄で、時姫はそのただ一人の後とりだ。かつては御所に足しげく通うこともあったが、時姫の父親が亡くなってからは参内もなくなり、現在は閑散としている。

ところが近ごろ、たった一人の時姫に御所から執拗な参内の命令が出るようになった。

命令を出しているのは【御門】<sup>みかど</sup>であつた。その命令に姫は、今まで曖昧な返事を繰り返すだけで、じつと屋敷内に留まっている。

【御門】の狙いは信太家に伝わる？鍵？である。しかし時姫は、父親から「決して【御門】に？鍵？を渡してはならぬ」と遺言されていた。そのため、時姫は【御門】の命令を拒否していたのだ。

【御門】。それは謎の存在だ。御所にいることは確かだが、誰もその姿を見た者はいない。しかし【御門】の命令は絶対的で、時姫一人だけが逆らっている。

源二は、もともと北面の武士であつた。それも、奇門遁甲を能くする特殊な一団に属していた。

信太從三位が御所に参内していた当時、從三位の目に止まり、懇望されて屋敷に入り込んだ。

そのころ從三位は、このような事態があることを予感していたのかもしれない。しかし請われて屋敷に住まうようになり、そのうち時姫を知るようになって、こんどは源二のほうが時姫を守ることが自分の使命であると思い始めていた。

優しい、とか正直だとかとは少し違う、時姫独特の透明感があつ

た。それは時として人に奇異の念を思わせるものがあつたが、源二の心に突き刺さるものがあつた。

「こちらでございます」

源二が案内したのは、屋敷の裏手にある、南天の茂みに埋まるように隠れている井戸であつた。

ただし、空井戸である。川の流れが変わつたのか、ある日、唐突に水が涸<sup>か</sup>れ、現在では蓋をしたまま忘れ果てられた状態になっている。

源二は井戸の蓋を持ちあげた。深々とした井戸に、縄梯子が垂らされている。

「これを降りていただきます。この日のあるのを予想し、抜け道を作っておきました」

源二の言葉に、時姫はこわごわと井戸を覗き込んだ。月のひかりが中天に懸かつて、井戸の底まで届いている。



## 抜け道

「源二、そちも一緒に降りてくれるのであろう？」

心細そうな時姫の声に、源二の胸はちくりと痛んだ。それでも、ゆっくりと首を振った。

「いいえ。それがしは、姫さまをお落とし申し上げるため、屋敷に留まるつもりです。一騒ぎいたして、敵の目を引きつけましょうぞ！」

源二の言葉に、はっと時姫は唾を飲み込んだが、それでも強くうなずいた。

「わかりました！ 妾は一人で参ります。そなたは敵の目を引きつけたら、逃げ出すのでしょうか？ まさか、切り結ぶなど、考えておりませんか？」

念を押す時姫に、源二は自分の身を案じる主人の心根を感じ、胸が熱くなるのを感じていた。

「あたりまえでございます。それがしの使命は姫さまを無事、お落とし申し上げることしかござりませぬ。抜け道を出たら、そこでお待ちください。それがし、かならずや姫さまのもとへ参上しますゆえ」

はい、と點頭して時姫はそろりと足を持ち上げ、井戸をまたいだ。指を縄梯子に絡め、慎重に降りていく。それを確認して、源二は蓋を持ち上げた。

「姫さま！ 蓋を元通りにいたしますぞ！ 暗くなりますが、底に達すれば、抜け穴があります。どうかお気をつけて……」

うん、と姫の声が聞こえてくる。どういわけか、時姫の声は童女のようにあどけなく響いた。

ごとりと蓋を元通りに戻すと、源二は井戸を隠すため、周りの茂みを蓋の上に重ねた。これで昼間の光で見なければ、そこに空井戸が存在することは判らないだろう。

さつと井戸に背を向けると、源二は正門の方角を見やった。

開門　と、喚き声が聞こえてくる。いよいよ敵勢は、戦を仕掛けるつもりだ！

どんだん、と正門の扉を叩く音がする。

「面倒だ。叩き壊せ！」と命令する声がした。

どーん、どーんと、なにか重いものを扉に突き当てる音がする。

源二は走りだした。

## 出口

蓋が閉まって、あたりは真っ暗になった。

手さぐりで縄梯子を降りていく時姫は、ただ機械的に手足を動かすことだけに専念する。

やがて、足先が底に着いた。ほっと溜息をつき、時姫は手をのばして、そつと井戸の内側を探る。

源二の言っていた抜け穴がある。

時姫が腰を屈め、四つん這いになってやっと通れるほどの高さである。頭を低くし、手を地面について、姫は這い進んだ。

空井戸とはいえ、湿気があるのか、妙な匂いが籠もっている。地面はじつとりと湿っていた。

やがて行く手がぼんやりと明るくなった。抜け穴の出口だ。

ばかりと時姫の頭が穴の出口から突き出される。穴は斜面に開いていた。まわりは、一面の茂みである。背の高いスキの穂先がかなかな空氣の動きにそよいでいるのが、月明かりに見てとれる。

ここで待つようと源二は命じていた。

その言葉を守り、時姫は膝を折り、その場に座り込んだ。静かな月夜に、かすかに虫の音が聞こえている。

ここは、どの辺かしら？

時姫はぼんやりと周りを見わたした。

茂みの向こうに一筋、川面が見えている。どうやら鴨川の川原のようだ。

その川越しに、月夜に照らされ、御所の建物が遠く見えている。

巨大な【大極殿】の大屋根があたりを圧するようにそびえ、その背後に一つの塔が天を突き刺すように高々と立っている。

？声？

塔の表面は銀色の金属で、それはどんな雨にも風にも風化しない不思議な素材で造られていた。紡錘形の塔の先端は鋭く尖り、下に行く<sup>おふね</sup>と魚の鰭のような羽根が四枚、塔を地面に支えている。塔は「御舟」と呼ばれている。

信太一族には言い伝えがあった。【御舟】は昔、空を飛ぶ船であつたという。船にしては、奇妙な形をしている。

【御舟】から降り立った人々が、ここ京の都を作り、徐々に広がっていったと、言い伝えられているが、詳しいことは判らなくなっている。

時姫はまだ母が生きていた幼いころを思い出していた。母は病弱であつたが、時折気分がいいときは、さまざまな昔語りをしてくれた。その中に、【御舟】の昔語りも混じっていた。

御所から目を逸らし、時姫は氣息を整えた。背筋をのばし、時姫は目を閉じる。

そのまま、じつと待つ。

ほどなく？声？が聞こえてくる。

ただし、常の人の耳に出来る？声？ではない。時姫のみが聞くことのできる？声？なのだ。

これが信太一族に伝わる【聞こえ】のちからである。この能力あるため、時姫は源二が報告をする前に敵の軍勢に気付くことができたのである。

世には？声？が満ちている。それは姫のほかには誰にも耳にすることの出来ない、ひそやかな囁きであつた。だが、時姫が耳を澄ませると、聞くことができるのである。

川のせせらぎ、風のそよぎ。すべてに？声？がある。その？声？に時姫は耳を傾けた。

？声？の中でもっとも強いのは、御所の【御舟】から発せられるものであつた。【御舟】は一日中？声？を周囲に向け発している。

その中から、時姫は信太屋敷から聞こえてくる？声？を聞き分けた。屋敷を取りまく軍勢の敵意に満ちた？声？。

時姫は眉をひそめた。

聞き慣れない？声？が聞こえる。

これは、なんだろう？ ひどく単調で、感情がまったく感じられない異質な？声？。

時姫は目を見開いた。

これは傀儡だ！

## 傀儡

ばりばり、べきべきと音を立て、屋敷の木の扉が外からの攻撃に耐え切れず押し開かれる。源二は立ち止まり、物陰に隠れながら、じつと観察を続けた。

篝火に照らされ、ずんぐりとした人のような形のものが立っている。人よりは数倍も巨大である。

どつしりとした両足に、膝元まで達する長い両腕。身体は真四角で、幅広い。頭があるべきところには窪みがあり、馬の鞍のような座席がしつらえてあった。その窪みに、人が座っていた。

きやつら傀儡くぐつを持ち出したのか！

扉を強引に押し開いたのは、傀儡のちからである。座っているのは傀儡師だ。傀儡師とは、傀儡を思いのままに動かす技能を代々伝えた一族であった。

つるりとした兜のようなものを被り、兜には眼鏡のようなものが付属している。傀儡師が顔を動かすと、眼鏡の雲母きんぼのような透明な板が火明かりを受け、煌めいた。

眼鏡は噂によると、夜の闇を昼間のように映し出すものらしい。

傀儡師の両腕が、傀儡の座席に突き出た何本かの棒をいそがしく前後左右に動かしていた。そのたびに傀儡は、ぎぎつ、ぎぎつと関節から音を立てて思いのままに動いていく。

傀儡が扉を押しひろげると、さっと数人の徒歩かちの者が屋敷内に飛び込んだ。暗闇を照らし出すためか、手早く篝火をそこかしこに設

置し始める。

次に、槍を持った兵士たちが、鎧の音をがちゃがちゃ騒がしく立てながら侵入した。



## 衣装

源二は戦いの予感にわれ知らず微笑が浮かぶのを押さえ切れなかった。確かに姫を無事逃すため自分は囷になるつもりである。ただし、どう囷になるかは敵の出方次第というものだ！

背中に担いだ笈おいの底の蓋を、源二は手さぐりで開いた。手に数枚の十字手裏剣が触れる。

源二の手首が素早く動き、十字手裏剣を次々と投げる。

ぎゃあっ、という悲鳴が兵士たちの間から上がった。みな首の鎧で覆われていない部分を押さえ、ばたばたと倒れていく。

さつと緊張が兵士たちに走る。源二は故意に足音を立て、その前を突っ切った。

あつ、と兵士たちは源二の姿を見て声を発した。

「時姫だ！」

「逃げるぞ！」

源二は時姫の衣服を持ち出して、それを頭から被っていたのだ。遠めには姫の姿に見えるであろうと期待したのだが、ものの見事に、囷に当たってくれたようだ。

篝火の明かりが届かない暗闇に、ひらひらと姫の衣装が見え隠れしている。兵士たちは釣られたように走り出した。

目の前に塀が迫る。とん、と源二は跳躍した。

たつた一跳躍で源二は塀の上にひらりと飛び乗ると、素早く周囲を見渡した。

屋敷の周りにいた数人の兵士たちが塀の上の源二を見上げ指さし「時姫」だと声を上げている。

さつと地面に降り立つと、源二は姫の衣服を頭から被ったまま、走り出した。

ともかく鴨川から離れる方向を目指す。本当の姫は、そこにおられるのだから。

どたばたと、みつともない足音を立てて兵士たちは追いかける。源二の足取りはひらり、ひらりと飛ぶようで、まったく足音を立てない。

閃光

うおおおん……。

暗闇を、ぱつと白い光が切り裂いた。はっ、と源二は立ち止まった。

二輪車<sup>うしまた</sup>だ！

数騎の二輪車が道を塞ぐように並んでいる。跨っているのは母衣<sup>ほろ</sup>武者たちだ。鎧の背中に旗指物を立て、二輪車の梶棒を握りしめている。

母衣武者たちもまた、傀儡師とおなじような眼鏡を兜の眉庇<sup>まひさし</sup>の下につけていた。

二輪車の前部にある照明装置が威嚇するように闇を照らし出していた。武者たちが梶棒をぐいつ、と回転させると、二輪車は震え、咆哮する。

二輪車、傀儡<sup>くぐつ</sup>……両方とも機械<sup>からくり</sup>の生き物どもである。

けたたましい音を立て、二輪車が向かってくる。跨る武者たちは手にした槍を水平に構え、源二を目がけて突進してきた。

源二は姫の衣装を脱ぎ捨てた。もはや目眩<sup>めくら</sup>ましをする段階は過ぎた。さつと向きを変え、と、屋敷の方向へ戻る。

屋敷の正門から、ずしり、ずしり……と足音を立てて傀儡が姿を現した。

源二は蹈鞴たたらを踏んで立ち止まる。背後からは二輪車に乗った武者たちが迫ってきた。

傀儡に乗り込んだ傀儡師は、源二の姿を見て、勝ち誇った笑みを浮かべた。顔の半分を覆った眼鏡が不気味に光る。がばつと傀儡は両手をひろげ、通せんぼの格好になる。

源二は懷に手を入れると、玉を取り出し、地面に叩きつけた。

ばあーんつ、と炸裂音がして、眩しい光が一瞬びかつと電光のごとく白く輝いた。源二が叩きつけたのは、目眩ましのための火薬玉だ。

わあつ、と傀儡師が悲鳴を上げ、顔から慌てて眼鏡を耑り取った。一瞬の光芒であったが、強烈な光輝が傀儡師が掛けている眼鏡を通じて増幅させたのだ。

今、傀儡師には何も見えない状態になっている。背後でも同じような悲鳴が上がっている。がちゃ、がちゃんと音を立て二輪車が倒れこみ、母衣武者たちが目を手で覆って、うずくまっていた。

傀儡はぎくしゃくとあつちによろけ、こつちに倒れこむような奇妙な動きを繰り返していた。傀儡師が操ることができなくなって、立ち往生しているのだ。

源二はその脇を駆け抜けた。

闇に紛れ、一散に走る。

時姫が待っている。

## 主従

時姫は立ち上がった。

がさがたとススキの穂を掻きわけ、誰かが近づいてくる。いくら月夜とはいえ、人の顔を見分けるほどの明るさではない。

時姫は、そっと着物の帯から懐剣を取り出し、握りしめた。敵であれば、せめて一太刀！ いや、それが無理なら、自害するつもりだった。

姫さまーっ ！

野太い声に、時姫は安堵の吐息を漏らした。その声は間違いなく、源二のものだった。

姿を現した源二に、時姫はぎくりと立ち止まった。

髪の毛は大童おおわらわに乱れ、着物のあちこちは切り裂かれ、返り血を受けている。手には抜き身の刀を下げていた。

「少々、手荒い仕儀に遭いもうしましたが、なんとか敵勢を撒いてまいりました。さ、急ぎましようず」

懐紙を使って刀身を拭うと、源二はぱちりと刀を鞘に納めた。

時姫は、うなずいた。

「案内あないを頼みます。妾は、外の事情は、まるで不案内ですから」  
「お任せくだされ！ まずは京から離れることでございます」

主従はその場を立ち去った。

## 熱風

熱風が真正面から吹きつけ、埃を舞い上げる。  
空気は乾ききっていた。

街道のまわりの畑の地面は罅割れ、あちこちにしぶとい生命力を持つ雑草が顔を出していたが、それらもすべて黄色く枯れ果て、より一層の荒廃を強調しているかのようだ。

ぎー、がちやん……

ぎー、がちやん……

軋み音を立て、一台の耕運機<sup>うし</sup>が乾ききった大地をゆっくりと動いていく。その後ろを、疲れ切った顔をした農夫が梶棒を持って歩いている。畑を耕しているのだ。

地面は無残に罅割れ、耕作行為そのものが無為としか思えない。それでも執念に突き動かされてでもいるのか、農夫は無心に畑の土を掘り返していた。

そのうち耕運機は咳き込むような音を立て、動かなくなった。農夫は諦め切った様子で、呆然と立ち尽くしている。

日照りであった。

「これは、酷い……」

蓑笠を押し上げ、源二はつぶやいた。

背後を歩いていた時姫は、源二が立ち止まったのに気付कि、足を止める。源二と肩を並べ、周囲の様子に目を止めた。

時姫もまた、日差しを避けるための笠を被っている。手には源二が枝から折り取った杖を持っていた。

「噂では聞いていましたが、これほどとは思っても見ませんでした……」

衝撃を受けている様子で、目にうつすらと涙が浮かんでいる。

源二は首を振ると、再び歩き出す。時姫はその背中に声を掛けた。

「源二……。なぜこのような有様になったのであろうか？　もしかや天の怒りか？」

「そうではござりませぬ」と源二は、憂鬱さを隠せずに答えた

「あれをご贐じあれ」

肘を挙げ、遠くの山脈を指差した。

遠霞に、威<sup>いこま</sup>狼<sup>ま</sup>の山々が連なりを見せている。

## 孤児

「あの山々の向こうは海になりもうす。冬になると海からの風は山の上で雪雲を作り、山の頂上に雪を降らせます。その雪は春になれば溶け、山中を伝い、やがてこの辺りの畑を潤す川の水となりもうす。しかし、この冬はあまり雪が積もりませぬ。従って、ここいらを潤す川の水も足りず、夏になって火照りと成り果てもうした……」

言葉を切り、ぐつと拳を固める。次に口を開いたときは、口調に怒りが籠められていた。

「日照りになることは、判りきつておったのでござる！ 御所の役人どもは、すでに春先から報告を受けておったはずじゃ。なのに、のうのうと知らんぷりを決め込んでおったのじゃ！ 少しでも民を哀れと思し召しなら、なんとかできたはずじゃのに……」

時姫は源二の口調に唇を微かに震わせた。目が驚きのあまり、一杯に見開かれている。

それを背中で感じとっていた源二は、つい憤然となった自分に後悔していた。

時姫の前では、いや、どんな相手でも、源二は怒りの表情を剥き出しにすることはない。いつも、陽気で快活な自分を演出していたのである。

が、あの呆然と立ち尽くしていた農夫の姿に、つい幼いころ目にした父親の姿が姿が重なり、怒りの感情を抑え切れなかった。

実を言うと、源二はこの近在の百姓の息子であった。まだ幼児のころ、これと同じような日照りが見舞い、飢えが村を襲ったのであ



る。水争いが起き、その争いで父親、兄、親類一同が次々と殺され、源二は孤児となった。

孤児となった源二を引き取ってくれたのが、京の御所で雑掌となっていた、義理の父親である。父親代わりの侍は源二に奇門遁甲の術を授けてくれ、さらには北面の武士に推薦すら、してくれたのである。

これでは、沢山の人間が死ぬなあ……。

そういう場面をこの目で見て知っているだけに、源二は何も言えず黙々と歩いていた。同情すら思い上がりである、と考える。だから、何も言えぬ。

## 河童

「源二、あれは何でしょう？」

不意に時姫が、何かを見つけたように声を高めた。立ち止まり、源二は姫の視線を追う。

かつては水の流れた川床であつたろうか、うねうねと蛇行した窪みが見える。その真ん中に、何かが　いや何者かが仰向けに倒れていた。

言葉を発した次の瞬間、すでに時姫は、そちらへ足を向けていた。

おやめなされ　という言葉で源二は呑みこんだ。こういう場面に時姫に「待て、暫し」と制止することは無駄であると知り抜いている。

時姫は意外と身軽に川床の斜面を降りていく。後を追う源二は、何かあつては一大事と、足を急がせた。

倒れていたのは人……のように見える何かであつた。

細い手足、顔のようなものがついているから、辛うじて人のように見える。が、その顔は、断じて人間ではない。

嘴くちばしのように突き出た口。閉じた両目は大きく、顔の半分ほどを占めている。頭の天辺がやや窪み、その周りをぺたりとした黒髪が取り巻いていた。

「人……でしょうか？」

尋ねる時姫に、源二は首を振った。

「人ではござらぬ。河童でござろう」

「河童？」

「左様、妖怪変化、魑魅魍魎の類でござる。おそらく、この日照りで頭の皿が乾いてしまったのでござろう。さ、このようなものに関わると、後生が悪うござる。先を急ぎますぞ！」

が、姫は動かない。まじまじと倒れている河童を見つめている。時姫が覗き込んだために日影ができて、河童の顔を日差しから遮る格好になる。

ぴくり、と河童の瞼が痙攣した。はっ、と時姫は口を開いた。

## 水

「生きておるようじゃ！ 源二、どうすればよい？」

源二は舌打ちをした。

「おやめなされ！ そのような妖怪に情けを掛けるのは、却って仇となるに決まっております！ 見捨てることじゃ。忘れもつたのでござるか？ 我らは追われているということを」

時姫は源二を見て、凜然と言葉を押し出した。

「妾<sup>わいわ</sup>には、そのようなことはできません。妖怪であろうが、人間であろうが、生きていることには変わりないはず！ さ、教えてたもれ。この河童を救う手立てを」

しかたない、と源二は河童の頭の皿を指さした。

「それ、その頭の天辺に皿がござりましょう？ その皿が乾いたため、動けなくなったのでござる」

「水を掛ければ生き返るのじゃな？」

言うなり、時姫は跪いた。すでに腰の水筒を手に行っている。ちやぽん、と水筒の中で水が動いた。

はっ、と河童の目が見開かれた。水の音に反応したのか？

時姫は水筒の栓を抜くと、河童の頭の皿に水を注ぎ入れた。ばかり、と閉じていた河童の口が開かれた。

次の瞬間、河童の手が動いて時姫の水筒を握りしめていた。時姫の手から水筒をもぎ取ると、大きく開けた口に中の水をだぼだぼと

注ぎ入れる。

ごく、ごくと河童の喉仏が動いた。

飲み干すと、ふーっと溜息をつき、河童は時姫の顔を覗きこんだ。

さっ、と時姫は立ち上がった。顔からは血の気が引いていた。その様子を見て取り、やはり止めておけばいいのに、と源二は胸のうちでつぶやいていた。

### 三郎太

見開いた河童の目は、あまりに異様であつた。

黒目ばかりで、白目の部分がほとんどない。人間離れた奇妙な瞳が、じつと時姫の顔を見つめている。

時姫と河童の視線が絡みあう。魅入られたように時姫は見つめ返していた。

思わず源二は前に出て、時姫の姿を隠すように立ち上がった。ゆつくりと河童は身を起こした。探るような視線を今度は源二の顔に当てている。

「礼を申す……」

ぼそりとつぶやく河童に、源二ははつと身構えた。右手は反射的に腰の太刀に伸びている。

「おぬし、喋れるのか」

ふつ、と河童の口が歪み、笑いの形を作った。

「当たり前だ。おれを何だと思っている」

「河童であろう！ 姫さまがおぬしを憐れと思し召しになって水にくだされたのじゃ。じゃによつて、決して仇をなすではないぞ」

「姫？ その娘、姫と呼ばれる身分なのか！」

指摘に源二は口をつぐんだ。たちまち顔が火照るのを感じていた。

しまった！ なんとという失態！

流れるような動作で河童は立ち上がった。立ち上がると、存外と背は高い。源二とほぼ同じくらいはある。

源二の背中越しに、時姫がこわごわ半分、興味半分といった様子で覗き込んでいる。

そんな時姫をちらりと見て、河童は口を開いた。

「お前ら、追われていると言っていたな」

源二はうめき声を上げた。

「おぬし、聞いておったのか？ 油断のならぬ奴！」

「身体は動かないが、耳はちゃんと聞こえていたよ。礼の替わりに、あんたらに良い隠れ家を教えてやる」

ふっと顔をそらし、山脈を見上げた。つられて源二も視線を動かす。

「あの山懷を見る。ここはこんな日照りに見舞われているが、あそこにはまだ緑がある。この辺りの百姓たちで、気の利いた連中はみな森に逃げ込んでしまっている。無理もない。こんな日照りでは、年貢を払えるわけもないからな。あんたらも、あそこを目指すが良いだろう。そのなりで百姓と称するのは、少し無理があるがな」

じろじろと河童は無遠慮な視線を二人に当てていた。むっとなつて源二は言い返した。

「なぜ百姓であると言うのが無理じゃと申す？」

「着物が新しすぎる。そんな、継ぎの一つもない、立派な着物を身に着けた百姓が、おるわけないだろう？」

河童の目が細くなった。笑ったのか。源二には河童の表情がよく読めない。

源二は渋面になったが、言い返せない。河童の言葉は、まさにその通りだったからだ。

ひよろり、と河童は歩き出したが、何かを思い出したかのように振り返る。

「おれは、三郎太。河童淵の三郎太だ」



## 対応

ぼつりと投げかけるように言うと、こちらの対応を待っている。

時姫が、口を開いた。

「妾は信太わらわ從三位の娘、時子と申します。また、これは從者の源二しのだ。以後、お見知りおきを願ひ申し上げます」

丁寧ていねいに頭を下げる。

源二は時姫に囁いた。

「姫さま、このような奴輩に名を告げるなど……」

「向こうが名乗っているのです。こちら名乗らないのは失礼ですよ？」

時姫は澄まして答える。

「それじゃ」と河童の三郎太は片手を挙げた。

「山中に入れば、あの杉林あたり」  
指さした。

「に、今は無住の廃寺があるだろう。荒れてはいるが、雨風は凌げよう。まあ、この日照りだ。当分、雨はなさそうだが」  
ぶっきらぼうに言い捨てるなり、いきなり走り出した。

とととと……と、川床の斜面を駆け上り、あつと言う間に向こう側に姿を消した。

出し抜けのことに、二人は暫し、呆氣に取られていた。

「なんとまあ……」

源二は今頃になって顔に汗が噴き出してくるのを感じていた。懷から手ぬぐいを出して拭うと首を振った。

「やはり物の怪は物の怪。人のようできて、その心根は違ったようでごさるな」

「悪い妖怪では、なさそうです」

姫の答に源二は、ぎよつとなった。

見ると時姫は河童の三郎太が去った方向を、面白そうな表情になって見つめている。そんな無邪気な時姫に呆れ、源二はことさらに厳しい表情を作って声を掛けた。

「姫さま。拙者、さきにも申し上げたように、きやつらは妖怪、魍魎魍魎の類でござりますぞ。親しみを覚えて情けを掛けなされると、思わぬ失態をいたしましょう。以後、お氣をつけあそばすよう忠告申し上げます」

時姫は唇を尖らせた。不服そうである。が、それでも源二の忠告に答える。

「判りました。充分、注意いたしましょう」

歩き出した。

源二が立ち止まっているのに気付き、振り返った。

「何をしているのです？ あの子郎太と申す者が教えてくれた廃寺に急ぎましょう」

## 雪解け水

杉林を指せ、と河童は言い捨てたが、山懐はかなり距離があった。

目の前に聳えている山塊は、つい目と鼻の先にありそんな錯覚があったが、実際は歩いて歩いても、いっかな近づく気配はない。そのうち、荒れ果てた景色が徐々に緑が増えてくる。罅割れた大地が緑豊かな草原に変わり、畑にもちらほらと作物が豊かな実りを見せていた。

夕闇が迫る街道を歩く主従を、その畑で作業している百姓たちがじつと見守っている。

いずれも例外なく視線は険しく、言葉を掛けるのがためらうほどであった。杖を突きながら時姫は源二に尋ねた。

「どういうことでしょう。みな、妾<sup>わらわ</sup>たちを、まるで親の仇のような目で見ております」

「水のせいでござる」

源二は吐き捨てるように答えた。

「山が近いせいで、この辺りには雪解け水が流れ込んでおります。あの日照りの村からここへ、水を奪うための連中が押しかけるのでござるよ。でございますから、あの連中は見慣れぬ余所者を警戒いたしておるのでござる」

「妾が水を奪う余所者に見えるのですか？」

「というより、余所者すべてが敵と思っておるのでございましょう。この辺りの者どもは水一滴たりとも、他の土地の人間に分け与えるつもりはないようでござるな」

源二の言葉どおり、少なくなった水筒に水を補給しようと、これまで何軒かの家に井戸を使わせてもらいたいと交渉したのだが、ことごとく、けんもほろろな応対をされてきたのである。

ようやく金を払って水筒を満たすことができたが、信じられないような金額を請求してきた。

「ともかく、このような土地は、早く通りすぎることでござる。つまらぬ<sup>いさか</sup>争いに巻き込まれる可能性がありまするからな」

源二は足を速めた。

## 強行軍

京を出て、もう十日になる。

二人の衣服は旅を続けるうち旅塵にまみれ、まあまあ、この界限の百姓の身に着けるもの、と言つても通るくらいにはなっていた。

源二の背負った笈おいには充分な食料の蓄えがあつたが、それでもこの旅を続けるうち、乏しくなつてきている。

そろそろ食料も補給しなければ、と源二は思っていたが、その当てが皆無だった。なにしろ旅籠はたこが存在しないのだ。

他人目につかぬように、との配慮で旅路を選択したのが、裏目に出た。人の往来が多い街道なら気の利いた旅籠くらい幾らでもあるだろうが、源二はそういった街道を避けてきた。

日照りが見舞っていなければ、百姓家に泊まるという選択肢もありえた。そうすれば、宿泊した先の好意をあてにして食料も補給できたはずである。が、すべて思惑違いであつた。

源二はちらり、と背後を歩く時姫を確認する。

見るからにか細い身体つきのどこにこのような体力が隠されていたのか、姫は源二のいささか強行軍ともいえる歩きに文句も言わず従いてきている。

内心、源二は舌を巻いていた。

## 焚火

そうこうするうち人影は全て消え、見上げると空には、ちらほらと星が輝いてきている。

源二は立ち止まった。

「この辺りで、野宿といたそう」

姫はうなずいた。

野宿には慣れてきている。街道を外れ、適当な茂みを探す。銀杏の太木の根本を野宿の場所と決め、時姫は膝を折って座り込んだ。腰を下ろすと、溜息をつき、がっくりと首を垂れる。

痛ましう感じつつ源二は姫の様子を見守った。

やはり、この旅は相当姫にこたえておるようじゃ……。

背負った笈あひを地面に置くと、源二は中から小さな紙箱を手にとった。箱を引き出し、中にきちんと整列している細い木の棒を摘みあげる。

棒の先には薬品が付着していた。棒の頭を紙箱の茶色い表面にこすりつけると、ぱつと火花が散って、棒の先が燃え上がった。

それを大事に乾いた細枝に移し替え、焚き火を燃え上がらせた。二人の顔が焚き火に、赤々と染め上がる。

源二の仕草を、時姫は興味深げに見つめていた。

「不思議なものですな。そんなことで火が点くなんて」

「南蛮人から買い求めたものでござる。南蛮人は、これを？マッチ燐寸？と称してござった」

得意になって源二は答える。

時姫の声が弾んだ。

「源二は、南蛮人に会ったことがあるのですね！どんな人たちなのです？妾わいわと変わったところがありますか？」

「見たところ、われらとそう変わり申さぬ。話す言葉も同じなら、顔形にいささかの変わりもありませぬ」

源二は煙管を取り出すと、燃え上がる焚火に近づけ、一服ぶかりと吸い付ける。

ぼんやりと時姫はつぶやいた。

「いったい、南蛮人とは何者なのでしょう。あの者らは、どこから来るのでしょうか」

「さあ、一度しつこく尋ねたことがござったが、結局、はぐらかされてしまい申してござる。おそらくは異国とつくにの者でござるうが、その異国がどこにあるのかさえ、見当もつきもつさぬでな」

ぼん、と源二は煙管を叩いて灰を焚火に落とした。次の瞬間、膝を浮かせ、太刀に手を掛けている。

「何者？そこに隠れている奴、姿を見せよ」

鋭い叱声が飛ぶと、がさりと茂みがざわめいた。ひよろりとした姿の人影が焚火に姿を表した。

「おぬしは……」

源二は、あまりの意外さに絶句していた。立っていたのは河童の三郎太であつた。



## 怒り

「おぬし、わしらを尾けてまいったのか？」

源二は緊張した声を上げていた。いつでも刀を抜けるよう、右手は柄に漂わせている。

三郎太は、うつそりとした声で答えた。

「そんな面倒くさいことをするものか。あんたらに逃げるよう、忠告するため探していたんだ」

「逃げる？ なぜじゃ！」

「この村の連中、あんたらを捕えようと、山狩りを始めるつもりだ」  
源二は意外な三郎太の言葉に、呆氣にとられた。

「わしらを捕える？ わしらが何をしたというのじゃ？」

三郎太は笑い声を上げた。けけっ、というような甲高い笑い声である。

「源二さん、とか言ったな。あんた、水を求めるため、相手の言い値で金を払ったろう」

三郎太の言葉に、源二は憤然となった。金を請求した百姓たちの顔を思い出し、腹が煮えくり返るのを覚える。

「当たり前じゃ！ やつら、どうしても金を払わないと井戸を使わせないと言い張るから……」

「それが仇になったな。あんたが気前よく金を払ったもので、金を持って二人連れが通る、という噂が、ぱっと広まった。せめて、少しでも値切っておけばいいものを。それに、そのお姫様だ」

三郎太は時姫を見た。

「そこのお姫様、あまりに美しすぎる。そこらの悪所に売り飛ばせば、いい金になると考える奴らも出てきた」

なにいつ……！ と、源二は怒りに我を忘れていた。手は勝手に動いて、刀を抜き放っている。

たたた……！ と駆け出すのを三郎太が制した。

「待て、どうするつもりだ？」

源二は喚いた。

「知れたこと！ わしのことは良い。したが、姫さまに対し、そのような悪企みを抱くとは、許せん！ 成敗してくれるわ！」

三郎太は処置無し、と首を振った。

「あんたは、どうやら腕が立ちそうだ。村の者が束になったところで、とうてい敵うまい。しかし、噂になるぞ」

びた、と源二の動きが止まった。

## 行動

「噂？ なんの噂じゃ？」

「綺麗な娘と、腕の立つ老人の二人連れ、という噂だよ。そのような剛の者、いったいどこから流れてきたのか、みな不審に思うだろうな。あんたら追われているのだろう？ それなら、無用な噂の火種になる振る舞いは、避けるべきではないか」

くくくく……と、源二は齒を食い縛っていた。悔しいが、三郎太の言葉は真を衝いている。どうにか気を落ち着かせ、源二は刀を鞘に戻した。

三郎太は、じつと耳を傾けている。

「聞こえないか？ 山狩りが始まったようだな」

源二は伸び上がって耳を澄ませる

暗闇に、微かに呼び交わす声が聞こえてくる。源二は声を聞き取るなり、焚火を踏みにじつた。

予想外の焦りに、汗がどつと噴き出してくる。

「源二……」

時姫が声を震わせる。

源二は焚火の始末に余念が無い。

ようやく火が消えたのを確認して、源二は顔を上げた。火が消えたこの場所は、真の闇に包まれている。三郎太や時姫の姿も、黒々した塊にしか見えない。

「姫さま！ 逃げますぞ！」

うん、とうなずいて時姫が立ち上がる気配。  
が、足音が乱れた。よろけたらしい。  
はつとなった源二だったが、時姫の腕を三郎太が先に支えていた。  
なにを……と言いつけた源二だったが、次の三郎太の行動に言葉を失った。

「これでは走れんな。疲れ切っておる」

いきなり三郎太は時姫を抱き上げた。  
はつ、と時姫の息を呑む気配。ついで激しい息遣いが聞こえた。  
姫も驚きで言葉が出ないのか。

「源二、走るぞ！」

いつの間にか三郎太は、命令口調になっていた。  
一瞬、源二は刀を抜いて三郎太を一刀の下に斬り捨てようかと考えた。が、時姫が三郎太の腕にあることを思い出す。  
さつと三郎太は姫を抱えたまま走り出した。慌てて、後を追いかける。

源二は、唇を噛みしめた。

なんという後手に回るのか？ これでは、この三郎太とか名乗る河童に、良いように鼻面を取って引き回されているだけではないか！

## 山中

姫の身体を抱き上げているというのに、三郎太は飛ぶように闇を走っていく。

微かにぺたぺたという足音が前方から聞こえ、それを頼りに、源二は後を追う。

もとより源二とても、姫を抱き上げて走る程度はなんでもない。しかし、今の三郎太と同じ速度で走れるかどうか、若いころならともかく現在では自信がなかった。

姫はずっと押し黙ったままだ。抱き上げられたとき、悲鳴すら上げなかった。

しばらく無言の時間が流れた。

「いつまで走るつもりじゃ？ 第一、ここは、どこら辺なのじゃ？」  
とうとう沈黙に耐えかね、源二が口を開いた。

「夜明け前には、安全な所に着く。今、走っているのは、山の中だ」  
暗闇から三郎太の平靜な声が響いている。姫を抱き上げ、さらに飛ぶように走っているというのに、その声に震えは微塵も感じとれなかった。

山の中……。

源二は空を見上げた。

雲はない。一面の星空に、時折は梢が通りすぎ、ちらちらと見え隠れする。確かに、山の中を走っているようである。

「しかし、妙じゃな」

「何が？」

「村の連中のことだ。金が欲しいというのは判る。じゃが、旅の者を襲ってまで手にしたいと思うとは。わしは、この辺りを知っておるが、それほど人気が悪い場所ではなかったように思う」

「緒方上総ノ介おがたかずさのすけという領主を知っておるか？」

三郎太の言葉に、源二はちよつと首を捻った。

「上総ノ介？ 聞いた覚えがある。この辺りを治めておる領主じゃな。じゃが、もう八十に近い歳ではなかったか？」

「その息子のほうだ。息子が家督を相続して、上総ノ介を襲名した。この息子がえらく働き者でな。ちまちまと、あちこちに出張っては、領地を稼いでおる。そのため、出来星の家臣が増えて、郎党を募るため流れ者が続々と集結した。以来、この辺りは無宿人、やくざなどの集まる村になったのさ」

## 沈黙

源二は驚いた。

「おぬし、何者じゃ？　ただの河童にしては、ちと物を知り過ぎてる」

「なに、おれも少々あちこちを流れ歩いているから、こんなことも耳に入るようになったんだ」

そう言えば……と、源二の胸にある疑問が湧き上がった。

「おぬし、なぜあんな所で倒れておった。河童があんなところで暮らしているなど、聞いた覚えがないわ」

「探していたのだ」

「何を？」

「河童だ。おれたちは、この近くの河童淵という所に住んでいる。だが、他の場所に住んでいる仲間のことは、何も知らぬ。おれたちは年々、数を減らしている。原因は色々考えられるが、同じところで仲間同士で暮らしていて、血が薄まったと、おれは考えた。そこで、他の場所に住んでいる河童を探しに旅に出たのだ」

「それで、見つかったのか。仲間は」

いや　と、三郎太は否定した。

「どこにも、他の河童はおらんのだ。おれは、それこそ、北から南まで探し歩いた。が、河童の噂は、欠片もなかった」

三郎太の声には沈痛な響きがあった。

源二は三郎太のある口調が気 became になった。

「おぬし、時々ふつと妙な口振りになるのう。時折、京に来る、南蛮人のような喋り方になる」

はっ、と闇の中で三郎太の息を呑む気配があつた。再び口を開いた三郎太は、用心深い口調になっていた。

「そんなに似ているか？ その……南蛮人とやらに」

「ああ、こうして闇の中を走っていると、お前が河童だということを忘れ、南蛮人と話しているような気になるわい。おい、どうした？ なぜ黙る」

三郎太は、それきり黙りこくっている。沈黙は硬く、手に触れそうであつた。

源二も口を噤み、走ることに専念していた。



## 杉林

夜明けが近づき、山中の木々が朧に見分けがつく状況になってきた。杉林に入ったらしい。間伐がされていないと見え、杉林は鬱蒼と暗い。

「なんじゃ、これは？」

杉木立に纏いつている妙な印に、源二は思わず声を上げていた。一本の縄が数本の杉に架け渡されている。縄には所々、萎びた胡瓜がぶら下がっていた。胡瓜が御幣だったら、これは注連縄である。

河童の神籬こもろか……。源二はやや皮肉な気分で、それを見上げる。

三郎太の腕に抱え上げられたまま、時姫は縄にぶら下がっている胡瓜を見上げた。黄色く変色した胡瓜は、今にも千切れて落ちそうである。

「結界だ。この結界を越えて山に入ることは、里の者に禁じてある」「なんの結界じゃ？」

「河童の結界だ。ここから先は、河童の領域なのだ。もし許しがなく里者が入り込めば、我らの報復を受けることになっている。そういう約定なのだ」

その言葉に源二は、大きく頷いていた。なるほど、だから安全な場所だと言っのじゃな……。

三郎太は抱えていた時姫をすんと、と地面に降ろした。一瞬、姫はふらついたが、それでもしっかりと地面を踏みしめる。

ありがとう……と口の中でつぶやいた。興奮が残っているのか、頬が赤い。

三郎太は腕を挙げ、森の中を指さした。

「ここから真っ直ぐ進めば、廃寺が見つかるだろう。荒れてはいるが、住むには充分だ。あとは、あんただけで行けるな？」

うむ、と源二はうなずいた。

「いろいろ済まぬな。世話になった」

思いついた、といった様子で、三郎太は言い添えた。

「あんたらのことは、仲間に言つてある。だから、あんたらに限つてなら、結界を通ることは自由だ。しばらくここで、ほとぼりを冷ますなりするが良い」

返事も待たず、三郎太は木立に分け入り、そのまま姿を消した。がさがさという茂みが掻き分けられる音がしたかと思うと、静寂が戻ってくる。

最初に出会ったときと同じく、別れの挨拶も無く、だしぬけに去っていく。

ほっ、と時姫は、溜息をついた。

「すっかりあの方に助けられてしまいましたね。お礼を言う暇もありませんでした」

姫の言葉に源二は苦々しい思いになった。

まったくもって、その通りである。しかし、そんな感情を振り捨て

て、口を開いた。

「参りましょう。ともかく、あれの教えてくれた廃寺の場所を確かめぬと……」

## 生活

微かな踏み分け道を登ると、程なく三郎太の言う廃寺が見つかった。

やや開けた平らな場所に、まさに崩れ落ちそうになって小さな庵が結んである。柱は傾いて歪み、屋根は落ち、壁には大きな穴が穿たれていたが、それでも山寺であった。

裏手に回ると、以前の住持が耕していたらしき畑の後が残っている。これなら、なにか作物を育てることもできる……。源二は内心、ここに腰を据える覚悟を固めた。

わっ、という時姫の驚愕の声に、源二は振り向いた。源二！  
と、時姫が興奮した声で呼んでいる。

何事かと表に回ると、姫が寺の縁側を指さしていた。指さしながらも、まるで小娘のようにぴょんぴょんと飛び跳ねる。

源二は、呆れた。

まるで姫さま、ここに来られて童女のころにお戻りになられたようじゃ……。

「源二、あれ！ あれを見て！」

指さしたのは笹の葉の上に置かれた数尾の魚である。鮎らしい。まだ獲れたてらしく、目は青々として、鱗が日差しに銀色に輝いていた。

魚の隣には袋があった。

持ち上げると、ずっしりと重い。袋の口を開けると、中には米が詰まっている。

「食べ物でござるな。魚と、米。これを食べという謎かけでござるうか？」

「あの三郎太が持つてきてくれたのでしょうか？」

嬉しげな姫の声に、源二はやや不機嫌にうなずいた。

「他にはござらん。あやつめ、我らに恩を売るつもりでござろう」  
源二の声の調子に、時姫は眉を顰めた。

「どうしたのです？ あの方の親切に、なぜそのような態度になるのです？」

源二は思わず恥じ入った。

そうだ、なにを自分はうじうじしているのだ。かつては北面の武士として武勇を鳴らした自分ではなかったか。

姫に振り返ったときには表情を緩め、いつもの自分に立ち返っていた。

「まさに、姫さまの仰られる通りでござった。さて、寺の中に調理できるような道具なりとも探しましょうず」

がたびしと軋む戸を引き開け、中に踏み込むと床板に囲炉裏が切つてあった。部屋の片隅には様々な家財道具が積まれている。

鍋、鎌、鉈、鋤、包丁など、生活するうえで必ず欲しくなりそつな物が、あれこれ並べてある。

前の住持の持ち物であったのか。あるいは三郎太が気を利かして、ここに持ち込んだのか。多分、後者であろう。

二人は手分けして、ここに心地よく住めるよう、掃除を始めた。

源二が枯れ草を束ね、即席の簾を作る。時姫は腕まくりに裾を端折り上げ、掃き掃除を始める。

主従の生活が始まった。

## 変化

廃寺に二人が住まうようになって幾月かが過ぎ去った。茹だるような夏は、冷んやりとした秋口の日々に席を譲った。

山の中に山菜を採りに行った帰り、源二は寺の庭に姫が座り込んでいるのを目にした。

姫の屈みこんでいる前には、一匹の獣がうずくまっている。小さな、猫ほどの大きさの生き物である。

しかし、すらりとした獣の姿は、猫ではない。白に近い茶褐色の毛並み、くりくりとよく動く目。鼻先は尖り、髭は忙しくぴくぴくと動いている。

管狐であつた。

形は狐に似ていたが、ただ一点だけ狐と違うのは、耳の形状がひどく人間に似ているところだった。ピンと立った狐の耳ではなかった。

「そう……そんなことがあつたの……」

姫は管狐に話し掛け、時折けらけら弾けるような笑い声を上げていた。管狐は姫になにか報告するように手足を激しく動かし、尻尾をぱたぱたと振っている。

背中に背負った山菜の籠を下ろしながら、源二は時姫に声を掛けた。

「？くだ？をお呼びになられたのか……」

源二の言葉に姫は顔を上げた。うん、とうなずいて立ち上がる。

そんな姫の顔を、源二は眩しく見つめた。

時姫はこの山寺で暮らし始めて、大きく変わりつつあった。抜けるような白い肌はそのままだが、血色が良くなり、頬に赤みが差している。動作は機敏になり、よく笑うようになった。

日差しの中を歩き回るのが良かったのだ、と源二は満足げにそんな姫の変わり様を嬉しく思っていた。

「京の様子を聞かせて貰っていたのです。関白殿がお替りになられたとか……」

管狐は人間の言葉を理解する。しかしその言葉を聞くことができないのは【聞こえ】の力を持つ信太一族の者に限られていた。自分の用が済んだと判断したのか、管狐はぴょんと跳ねて、茂みに姿を隠してしまう。

管狐の後姿を見送り、源二は話しかけた。

「京が恋しゅうござるか？」

ううん、と姫は首を振った。

「京にいたころは、妾はずっと籠の鳥みたいなものでした」

籠の鳥……。そんなことを考えていたのか。源二は改めて、姫の変化を痛感していた。



## 疑惑

時姫は源二の手に持っている枝に目を止め、指さした。

「それは、なに？」

「ああ、これでございますか。五加皮ごかひの枝でござりますわい。これを火にくべ、湯に入れて煎じれば、茶になり申す。胃の働きが良くなり、通じも楽になります。山菜採りの合間に目にし、五加皮茶でも点てましょうかと参じました」

まあ……と時姫は笑顔になった。

「野点のだて、ですね。源二も、風流なところがあるのですね」  
時姫は寺に入り、さっそく茶の用意をする。用意を待つ源二は、縁側に腰を下ろした。

のんびり景色を楽しむうち、ひよろりとした影を見つけ、微かな不安が胸に湧いた。影は、三郎太であった。  
背中に日差しを受け、半身が影になっている。手にはそこから掘り返したのか、土のついたままの長簪を下げている。

三郎太は、ちよくちよく訪ねるようになっていた。訪問するたび、木の実だとか、川魚だとかを手土産に持ってきてくれるので、それは有難かったが、源二は微かな疑惑を三郎太に抱いていた。

無言で近づくと、長簪を持った手をぐいと突き出した。源二は顔を顰めた。

「まあ、三郎太！」

背中で時姫の弾んだ声がする。振り向くと、姫は目を輝かせ、三郎太を見つめていた。

縁側から庭に降り、草履を履くと、いそいそと三郎太に近づいた。三郎太の持っていた長簪に気付き、袂で受け取った。

くるりと源二に振り向き、口を開いた。

「源二、三郎太が長簪を持ってきてくれました！ 夕餉は、とろろにいたしましょう」

源二は無言で頷いた。

秋の日差しに時姫と三郎太が並んで立っている。その光景に、源二の胸のうちに、小さな氷に似た疑惑が育っていた。

まさか、な……。

源二は急いで淡い疑惑を打ち消した。

## 碁盤

縁側に碁盤が出されている。

源二は黒石を一つ手にし、ぱちりと井目せいもくに置いた。三郎太も白石を手に打った。

ひとしきり、ぱちり、ぱちり……と二人の碁の勝負が続いた。

庫裏で見つけた碁盤に、源二は喜んだ。京の都にいたころは、さんざん打ったものである。

しかし、ここでは相手になる者がいないと嘆いていたが、なんと三郎太が心得があると言ってきた。つくづく妙な河童であると、源二は思っていた。

時姫が源二に五加皮茶ごっぺいを淹れて持ってきた。三郎太には湯冷ましを出した。

河童は熱いものは口にできぬと言うので、時姫は湯冷ましを用意するようになってきている。

時姫から湯冷ましを満たしたぐい飲みを受け取ると、三郎太は礼も言わず、ごくりと飲み干す。そんな三郎太を、時姫はじっと見つめていた。堪らず源二は声を掛ける。

「姫さまも、一つお飲みになれますか？」

「はい、頂きましょう」と時姫は、熱い茶を満たした湯呑みを手に持った。

口元に近づけたその時、姫の顔色がすうつと青ざめた。

ころりと湯呑みが板敷きに転がり、中身の茶が零れて染みを作る。はっ、と源二が見ているうち、時姫はうつと口を押さえ立ち上が

った。早足で裏手に駆け込むと、その場で蹲った。

「どうしたのかしら……なんだか、お茶の香りに、込み上げて……」  
弱々しく笑う。

源二の胸の氷が、一層の厚みを増した。

かつて源二は妻を持っていた時期があった。その期間は短かったが、源二の唯一の甘い想い出であった。

その妻は身籠り、やがて月満ちたが、子供は死産だった。妻もまた子供と運命を共にした。それ以来、源二のなにかが喪われたのである。

その記憶が蘇ってくる。

悪阻つわりではないか……。

源二の胸のうちに、ずっしりと氷は居座っていた。

## 永樂錢

年が変わり、春になって、源二は里へ降りて行つた。背中に薪炭を背負っている。冬の間、源二は山で炭焼きをして過ごしていた。この炭を村で売るつもりである。

金子は京を脱出する際に笈に用意してあつたが、うっかり更の永樂錢を詰めてきたのが間違ひであつた。

この辺りでは縁の欠けたり、表面が罅割れた、いわゆる鑿錢びたをやとりするのが普通で、新鑄の錢など見たことのない人間が圧倒的多数である。そんなところで水を求めるため新品の永樂錢を使つたのが裏目に出て、あの山狩りとなつた。

源二は炭焼きで生計たつきの道を立てるつもりであつた。それに、炭焼きの親爺となれば、他人の詮索の目を引きにくい。

月代はわざと剃らず、髭も伸び放題に伸ばしている。背中に負つた薪炭の重みが、自然と背中を曲げ、北面の武士としての堂々とした振る舞いも隠してくれる。まさに、むさ苦しい炭焼きの親爺の姿であつた。

村に入つて最初の驚きは、関所がないことであつた。普通、関所は様々な所に設けられており、通過するたび関所役人に何がしの礼金を献上しなくてはならないのだが、領主の緒方上総ノ介は総ての関所を全廃させたと聞く。

理由は、関所があるために商人が集まりにくく、上総ノ介は自国を富ませるため関所を全廃させたのだそうだ。

村に入ると、市が立っていた。それも、相当に大規模なもので、

京の都でもこれほどの人出は、源二は目にした記憶がなかった。

これは？ 楽？ というものに違いない……。

## 甚助

市を立てるために鑑札が必要である。鑑札を発行して貰うためには膨大な運上金が必要だが、その鑑札も上総ノ介は全廃させていた。上総ノ介の狙いは見事なまでに図に当たり、商いを求める商人は領内に続々と集まってくる状況になる。

村を見下ろすようにして、山の中腹に城が建設途中の姿を見せている。落成途中であつたが、源二の見たことのないほどの規模で、幾人もの大工が足場を組んで盛んに作業をしている。緒方上総ノ介支配の豊かさを象徴するような巨城であつた。

市の端に源二は荷を降ろし、地面に座り込んで客待ちをすることにした。煙管を取り出し、口に咥える。表情はわざと緩め、ぼんやりとした体を装っているが、源二の目は機敏に動いて、辺りに気を配っている。

ほどなく客がついて、源二の炭はたちまちに売り切れた。市には物を売るだけでなく、様々な料理を出す店が並んでいて、それらの主人が薪炭を求めていたのである。

代金を懷に捻じ込み、源二は立ち上がった。冷やかしの客を装っているが、その心中には嵐が巻き起こっていた。

姫はあれから腹が目立ち始め、すでに臨月を迎えていた。源二は墮ろすべきだと説得したが、時姫は頑として聞き入れなかった。

どのような赤子やせいが生まれてくると思し召す……。源二の言葉に、姫は頭を振って答えた。

「どのような赤子でも、三郎太様の子供です。妾は命に懸けても、

守ります……」

きつぱりと答える姫の顔は誇りに満ち、幸せに輝いていた。

「三郎太様」と姫は呼んだ。その言葉には限らない愛情がこもっている。

どうすればよい……。

懊悩が源二の注意力を削いでいたようだ。肩をぼん、と叩かれるまで、その男の接近に気付かなかったのは、迂闊と言つべきだろう。

「猿まじひの源二さんじゃないか？」

ぎくりとして、源二は声の方向に身体をねじ向けた。

ひよろりとした瘦身の男が薄ら笑いを浮かべて立っている。やや猫背の男は、覗き込むような目つきで源二の顔を穴の開くほど見つめていた。

身につけているのは着流しに、だらりとした綿入れで、月代は剃らず辮りにしている。細身の刀を落とし挿しにして、遊び人風であった。

男には頬に目立つ傷跡があった。その傷跡のせいで、男は常に引き攣ったような薄笑いを表情に刻ませていた。

源二は一瞬にして、男の問いかけをはぐらかすことの無意味に気付いた。すでに相手は源二の正体を見抜いている。

「啄木鳥きつつきの甚助だったな。確か」

にやり、と甚助と呼ばれた男は笑いを浮かべた。微かに顎を挙げ、連れ立つように合図をすると背中を向け歩き出す。

源二は、その後に続いた。



## 珈琲

城の作事場がよく見える茶店に、甚助は源二を案内した。どうやら城の作事見物は、この辺りの住民の良い娯楽になっているようで、店は賑わっていた。

「珈琲を頼む」

店の娘に甚助は横柄に命じた。赤い前掛けをした娘は「珈琲ひとつ！」と独特の口調で奥へ声を掛ける。程なく甚助の注文が運ばれてくる。

これが、珈琲か……。

噂では聞いていたが、見るのは初めてだった。薄手の磁器の茶器の中で、薄墨のような真つ黒な液体が湯気を立てている。南蛮人が持ち込んできた色々な物の中に、珈琲も入っていた。

甚助は珈琲に、白い液体と砂糖を入れて、金属製の茶匙で掻き混ぜた。真つ黒な液体が、泥のような茶色に変わる。

「それはなんじゃ、豆乳かの？」

牛乳だ、と甚助は答えた。牛の乳ちちなのだ、と説明する。それを聞いて、源二はうへつと首を竦めた。

耕運機うしの乳を飲むとは、とうてい信じられぬ！ まさか、汽油ガソリン脂のことが？

甚助は「いやいや、その？うし？ではない。生き物の？牛？なのだ」と言い足した。説明をされても、さっぱり源二には判らない。

甚助と源二は奇門遁甲を能くする御所の侍組の仲間であつた。しかし、肝心の御所の内部で続く権力争いのため、組はばらばらに分裂し、嫌気をさした源二は信太従三位の誘いに乗る氣になつたのである。

甚助とは、あまり組んだことはなかつた。それでも、ちよくちよく甚助の噂は耳にしていた。それも、良くない噂ばかりである。

曰く、おのれの腕前を鼻に掛け、他人に酷薄な性格である。曰く、欲が深く、狡賢い……。ともかく、朋輩にするには相応しくない、という最低に近い評価であつた。

その、甚助が源二に声を掛けた。

何が狙いか、まるで判らぬが、うかうかと乗らぬことじゃ……。

## 仕事

源二は作事場を眺めた。

城の石垣を組むため、沢山の傀儡くぐつが働いている。これ程の数の傀儡が働いているのを、源二は初めて目にしていた。

縄張りを見て、源二は内心首をかしげた。

城の構造は熟知しているが、どうにも見慣れぬ形だった。城の前面にあたる斜面が大きく切り開かれ、なだらかな坂になっている。その先が湖になっていて、完成途上の城の姿が鏡のような湖面に映っている。

見とれている源二に甚助は話しかけた。

「大きい城じやろう？ 破槌城はじちというのじゃ」

破槌……？ と問い返す源二に甚助は指で字を書いて教えた。

「この村も殿が破槌と改めた。前は井ノ口と言ったが、そう名を改めたのじゃ」

美味そうに珈琲を飲み干すと、甚助は上目遣いになって、そつと顔を近づけてきた。

「源二さん。あんた今、何をしている？ 炭焼きの親爺だけかい？」

「当たり前じゃ。ほかに何があるうか」

くつく、と甚助は引きつったような笑い声を上げた。

「そんな与太話を、おれが信じると思ったのかね。ちょっとばかり、面白い噂を耳にしたんでね。京の信太屋敷から、娘が一人、出奔し

て、それつきり誰も行方は知らない……。面白いとは思わないか」

「思わんな。それが拙者に、いったい何の関係がある？」

「その時、ひどく腕の立つ従者が一緒に逃げ出した、と噂に聞いたんだがね。それが実は、あんたじゃないかと、睨んでいるんだ」

「知らん」と源二は首を振った。

「それより、お前こそ、何処で何をしておるのじゃ。まだ素破、乱破仕事に未練を残しておるのか？」

甚助は得意げな表情になった。

「おれか？ おれは、こう見えても、この緒方上総ノ介配下の家臣に仕えておる。だからあんたに声を掛けたんだ。あんたと組めば、面白い仕事ができそうだ」

「断る！」と源二は言下に首を振った。

## 上総ノ介

その時、甚助の胸の当たりで「ぶぶぶ」という奇妙な音が響いた。「あ」と甚助は懷に手を入れ、印籠のような形状の道具を取り出した。

ぱちりと貝殻のように開くと、耳に押し当てる。

「はい、甚助でござる。はあ、はあ、殿が……承知！」

印籠を懷に収めると、甚助は立ち上がった。作事場に向け、大声を張り上げる。

「皆、聞けえーっ！　今より殿がお通りになられる！　道を空けるーっ！」

甚助の大音声に、傀儡や作業中の大工は慌ててその場を離れていく。

源二は呆氣にとられていた。一体全体、何がおきた？

次の瞬間、さつと勢いよく建設中の城門が開かれ、そこから二輪車の爆音が響いた。

真っ黒な塗装の二輪車が飛び出した。二輪車には一人の若者が颯爽と跨っている。

片肌を脱ぎ、兜も被らず、鬚は茶筌に結ってある。後から数名の徒歩の者が脛を飛ばせて走っていく。

若者は二輪車の梶棒を一杯に開いて、全速力で駆け抜けた。

「あれが、上総ノ介殿だ」

甚助の解説の言葉に、源二は驚いていた。まだ青二才ではないか。

徒歩の最後に、瓢箪を抱えた貧相な男が、せかせか駆けて行く。  
顔を真つ赤に染め、遙かに遠ざかつて行く二輪車を追いかける。瓢  
箪には機能水スポーツ・ドリンクが詰まっているのだろうか、ひどく重そうである。

「そして、あれが、おれの仕えている木本藤四郎越前ノ守さまだ。  
ああ見えて、上総ノ介様の信任が篤く、家臣の中で異例の出世をな  
しとげたお人だ。あの人の配下でいる限り、おれもいつかは城持ち  
になれると考えている……」

## 無線行動電話

源二は甚助の懷を指差した。

「今さつき出した小道具は、何じゃ？」

「ああ、これか」

甚助は、さっきの印籠を取り出した。表面はつるりとして、真ん中から二つに割れるような蝶番があった。

「無線行動電話と南蛮人は言うておったな。これで、遠くにいる相手と話すことができるのだ。さっぱり理屈は判らぬが、しごく便利な道具じゃ。さっきは、あの藤四郎様が殿が二輪車をお責めになるので、道を空けよと命じたのだ。あの二輪車は上総ノ介殿の一番のお気に入りで？千載？という名をお付けになつておる」

「南蛮人が、ここにも参つておるのか？」

源二の質問に甚助は「いけねえ！」という表情になった。うつかり口を滑らせた、といった体だが、源二は信じなかった。甚助の言葉には、すべて裏がある。

「なあ、源二さん。おれの話に乗る気は、ないのかね？ あんた程の腕前の持ち主が世間に埋もれるのは惜しい。そうじゃないか？」

源二は立ち上がった。

「拙者に構わんでくれ！一言、念を押しておく。良いか、もしこれ以上しつこく付き纏うつもりなら、こちらにも覚悟があるぞ！」  
本気だった。源二は殺気を込めて甚助を睨みつける。

一瞬しげしげと真顔になる甚助だったが、すぐ笑い顔になった。

「怖や、怖や……源二殿の殺気は物凄い……」

剽げた様子で甚助はつぶやいた。

源二はくるりと背を向けた。物も言わず去っていく。

しかし奴が諦めるとは思えなかった。源二は、甚助の執念深い視線が背中に貼り付いているのを感じていた。



## 陣痛

後を尾けられていないか確かめるために手間取り、源二が山寺に辿り着いたのは、紅月が山の背に登ったところだった。

今月は紅月だけで、藍月は出ていない。藍月と紅月が同時に空にあるのは、一年の内の三分の一程である。そんな時は二つの月の色合いが交じり合い、この世のものとも思えぬ幻想的な影ができる。

赤々とした紅月の光に、源二の胸は騒いだ。

結界を通り過ぎるとき、千切れそうになっている注連縄に気付いた。すでに胡瓜は地面に落ち、残った縄だけがぶらんと結界の残骸となっている。

これで、結界と言えるのか。微かな不安が湧く。

「源二！ どこへ行っていた？」

三郎太が目を一杯に見開いて飛び出して来た。

「何があつた？」

源二も叫び返した。三郎太の様子は只事ではなさそうである。

「姫が……産まれそうだ！」

なにいつ！

源二は寺に急いだ。

「湯を沸かせ！ 桶を用意せい！」

口早に命令する。ところが、三郎太はおろおろ右往左往するばかりで、まるで役に立たない。

源二は戸を荒々しく引き開けた。

「姫！」

寢床から時姫が顔を持ち上げた。顔色は真っ赤で、肩で息をしている。

「源二、生まれそうです……」

うーっ、うーっ……と陣痛に顔が醜く歪む。

「早過ぎる！ くそっ……」

源二は急ぎ姫の側に跪いた。時姫は込み上げる陣痛に身を反らせ、床に延べた布団を掴んで、必死に耐えている。

こうなつては自分が赤子を取り上げるしかない……。源二は覚悟を決めた。

ようやく三郎太が、湯を用意してきた。

時姫の妊娠がはつきりして、三郎太は山寺に泊まり切りになっていた。河童と言えども、人並みの父親としての自覚はあるらしい。

「姫、それがしが赤子を取り上げますぞ！ よろしいか？」

うん、と姫は頷いた。すでに苦痛で、返事をする気力もない。

「よし……三郎太、おぬしは姫の手を握っておれ！ さあ、姫……大きく息を吸って……そうそう、ゆっくりでござる。息を吐くときも、ゆるりと気を静めるのじゃ……よろしい、産まれますぞ！」

ああーっ、と声を立てず、時姫は大きく背中を反らせた。全身にびっしりと汗が流れている。

源二はゆっくりと手を伸ばし、そーっと時姫の膣内に挿入した。

指先に、赤子の頭が触れる。力を込め、五指で挟み付けて、ゆるゆると引っ張る……。

## 産声

おぎゃあーっ！

力強い、産声が山寺を満たした。

ほかほかと湯気を立てる真っ赤な塊を、源二は取り上げた。

「姫っ！ 男の子じゃ！」

両腕で赤子を抱え、源二は喜色を上げた。

紛れもない、人間の赤ん坊である。心配した頭の皿など、どこにも見当たらない、人間の子供であった。

源二は手早く臍の緒を始末する。

時姫は両腕を伸ばし、源二の腕から赤ん坊を受け取った。胸をはだけ、赤ん坊に乳を含ませる。こくん、こくんと音を立て、赤ん坊は母の乳を吸い込んでいる。

ほのぼのとした幸福感が、その場を支配した。

「名前を付けなくてはな……」

時姫の手を握った三郎太が、つぶやいた。

「三郎太殿の一字を貰い、時太郎というのは、どうでしょう？」  
時姫の答に、三郎太は笑った。

「良い名だ……。時太郎、おれの子供だ！」

赤ん坊の顔を覗きこむ。

と、その目元を指差す。

「痣があるな……」

ああ、と時姫は、うなずいた。

「その痣は、信太一族の男には必ず現れる徴なのです。妾の父御にも有りました。すなわち、信太家の徴……。この子は紛れもなく、信太家の男児ですわ」

「三郎太、抱いてみよ」

源二の提案に三郎太は仰天した顔つきになった。

「おれが、か？」

「そうじゃ。おぬし、父親になったのであろう？」

恐々と三郎太は、時太郎と名づけられた赤ん坊を壊れ物を扱うように時姫から受け取る。源二は助言した。

「肩に担ぐのじゃ。そうして背中を叩いて、げっぷをさせてやれ……」

……  
とんとんと三郎太は赤ん坊の背中を優しく叩く。げっぷ、と赤ん坊がげっぷをする。

ほっ、と三郎太の顔が綻んだ。

## 覚悟

直後、赤ん坊は背中をぐーっと反らし、全身に力を込めて泣き出した。

ぎゃあーっ！

驚くほど大きな泣き声であつた。三郎太は、ぎよっとなつた。

「ど、どうした？ おれが、何かしたか？」

時姫がつぶやいた。

「？声？が満ちております……。敵意に満ちた？声？……。源二、これは敵です！」

目を見開き、顔色は青ざめていた。

源二は、さつと身を翻し、戸を僅かに開いて外を覗き込んだ。ひしひしと軍勢が山寺を取り囲んでいる。

尾けられていた！ なぜだ？

充分過ぎるほど、注意してあつたはずなのに……。

源二の目が部屋の中に漂う、微かな銀線を捉えていた。目に見えるか、見えないか、ほとんど判別できないくらい細い糸である。

あつ、と源二は立ち上がり、上着を脱ぎ捨てた。ころりと小さな虫が床に転がる。

摘み上げると、豆粒ほどの蜘蛛である。蜘蛛は干乾びて、死んでいた。

しまった！ 標蜘蛛<sup>しやこ</sup>じゃ！

奇門遁甲の技に、虫を使う技がある。蜘蛛の糸を吐く器官に傷をつけ、死ぬまで糸を吐き出させる術があった。甚助は源二の上着に、その術を施した蜘蛛を付着させたのだ。

「三郎太、結界はどうしたのじゃ？　ここは河童の結界に守られておるのではなかったか？」

ごくり、と三郎太は唾を呑みこんだ。

「それが……河童は忘れ易い生き物なのだ。最初の、里人との争いで結界の約定が決められ、それ以来ずっと揉め事は何も起きなかった。それ故、河童の大多数が結界の存在も意義も忘れ果ててしまっている……。おれがお前たちのことを頼んだときも、仲間たちは結界のことを完全に忘れていた……」  
がつくりと首を垂れる。

ええい、役立たずが……！

立ち上がり、今まで手にすることもなかった刀を掴む。京を脱出するとき身につけた鎖帷子を取り上げる。

くるくると身は動き、戦支度を整える。

「時姫様！　三郎太！　覚悟はよいか？　この囲み、どのようにしても脱け出ようぞ！」

三郎太は強くうなづく。時姫の手をとり、立ち上がらせる。産後の時姫は、さすがに辛そうである。

源二は死を覚悟していた。

## 作戦

「甚助、囲みは充分だ。早く、懸かれの下知をせぬか！」

苛々と顔中に髭を蓄えた大男がつぶやいた。

「まあ、待て」と啄木鳥の甚助は答える。

目の前に、紅月の仄かな赤みがかつた光に照らされた山寺が見えている。

相手は猿まの源二。用心し過ぎるということはない。

ぶつぶ……、と懐ケータイの無線行動電話が微かな震動音を立てた。

ぱちりと開くと、画面に「電子メール矢文あり」と表示されている。開くと

東、用意よし

西、用意よし

と、あった。

甚助たちは南側を囲んでいる。北側は、わざと手薄にしている。こちらから攻め立て、北側に誘い出す作戦だ。

もつとも、源二ほどの手練れがこんな子供だましの作戦に乗るとは思えないが。

それにしても、先程の叫び声は何だったのだろうか？ 何だか、赤ん坊の泣き声みたいだったが。

甚助は周りの男たちに向け囁いた。

「よいか、目的は信太従三位の娘、時子ただ一人。決して、殺してはならぬ。生かして、都へ連れて行くのだ。首尾よく時姫を京の【御門】に会わせることができれば、恩賞は思いのままと知れ！」

甚助の言葉に、男たちはうなずいた。



## 確信

村で源二を見かけ、甚助は直ちに信太従三位の娘と結び付けていた。奇門遁甲の仲間がばらばらに散ったとき、源二が繁々と信太屋敷に伺候していたことを甚助は思い出していた。

必ず、あの中に時子がいる！ それは確信だった。

源二が立ち去った後、甚助は流れ者、半端者を集めて今夜の襲撃を計画した。主人である木本藤四郎には内緒であった。こつそりと事を運び、すべて終わった後報告するつもりである。

藤四郎に言上すれば、すぐさま正規の兵を集めることができるであろうが、それでは甚助の旨みというものが全然ない。

うまく立ち回れば、木本藤四郎を跳び越え、一気に緒方上総ノ介に取り入ることも可能である。

いや、もしかしたら【御門】と直接取引ができるかも。

仲間になった男たちを見やり、甚助の胸に微かな不安が湧いた。

こいつらで、大丈夫だろうか？

集まっている男たちは、皆、思い思いの装備に身を固め、腕を撫している。一目ちらつと見ただけで、到底、まともな稼業とは思えない格好だ。山賊と紙一重、いや山賊そのものの暮らしをしていた連中も多い。

緒方の領土拡大に、新参の家来が必要になって、諸方から続々と仕官を目当てにやってきた連中である。しかし仕官にあぶれ、不満を持っていたのを、甚助が声を掛けたのだ。

あぶれるのには、大きな訳がある。

戦に必要なのは勇氣ではない。無論、腕力でもない。必要なのは、留まれと命令されれば石に齧りついても留まる愚直さであり、引けと命じれば、目の前に止めを即座に刺せる敵がいても、未練なく引ける忠実さである。

こいつらは、ただおのれの腕自慢、それだけで、知恵などは欠片もない。あるのは下劣な欲望だけである。

甚助も同じようなものだが、それでもおのれの欲望を包み隠す程度の知恵はあった。

まあ、いい。とりあえず頭数は揃った。不測の事態があっても、甚助はなんとか対処できる自信はあった。

さつと甚助は手を挙げた。

男たちは、一斉に立ち上がる。

弓

「待て！」

急いで甚助は制止した。

山寺の屋根、煙り抜きに人影を認めていた。

あれは……源二だ！

手に弓を持っていた。

源二は屋根に立ち上がり、きりきりきりと弓を引き絞る。  
一杯に引くと、

ちよう！

とばかりに一矢を放つ。

次の瞬間、ぎゃあと叫び声を上げ、一人の男が仰け反った。胸に  
深々と矢が突き刺さっている。

わっ、と男たちは浮き足立った。慌てて弓を取り、矢を番える。  
と思ったら、もう矢を放っている。矢はひよろひよると飛んで、屋  
根に力なく突き刺さった。

馬鹿者どもめが……。

甚助は苦りきった。

源二は屋根に上がっている。上から下へ矢を放てば威力も倍増す  
る。反対に低いところから矢を放つても、中々命中するものではな  
いことは、戦の常識だ。それくらい、知らぬ者がないのか？

屋根の源二は次々と矢を番え、充分に引き絞ったところで放っている。放たれるたび、次々と悲鳴が上がる。

その姿を見上げ、あらためて甚助は見惚れていた。

さすがは、猿の源二！

敵ながら、天晴れである。

## 返し矢

しかし、ここは感心している場合でもない。甚助はそろりと立ち上がり、杉木立を楯に、じりじりと移動し始めた。

源二の振る舞いに疑念が生じていた。

あまりに派手すぎる。なにか、他の狙いがあるような……。

ぐさりと突き刺さった敵の矢を、源二は掴むと弓に番えた。ぐつと引き絞り、放つ。

上がる悲鳴。

「返し矢だ！」

「返し矢にやられた！」

恐怖の聲が上がる。

古来、返し矢は、必ず命中する、恐るべき矢であると言われていた。

浮き足立つ連中の背後から甚助は叫んだ。

「火矢を放て！」

甚助の声で、男たちは救われたように火矢の用意を始めた。屋根の源二が叫ぶ。

「甚助、やはり、お前か！」

甚助を狙って弓を引き絞った。

かつ！ と、甚助の隠れている杉の幹に矢が突き刺さった。一瞬、甚助が頭を下げなかつたら殺られていたところだ。

へっ、と甚助はあざ笑った。

もう源二の手に矢は尽きている。返し矢をしたのが、その証拠だ。だが、源二はまだ奥の手を持っていた。懐に手を入れる。

なにをするつもりだ？

と、源二は懐のなにかを手に一杯に掴み、ぱつと空中に投げ上げた。

## 火矢

ちゃり、ちゃりーん！

金属の涼しげな音色が男たちの耳に届いた瞬間、全員の動きが止まった。

「そうれ！ 早いもの勝ちだぞ！」

もう一度、源二は手の中のかなにかを撒き散らす。

「金だ！」

一人の男が喚いた。

「金だぞ！」

わあつ、と男たちは立ち上がった。

「馬鹿、やめろ！」という甚助の制止の声もあらばこそ、男たちは目の色を変え、源二が撒き散らした銭に殺到する。

足元に転がった一枚を摘んで、甚助は首を振った。銭は新鑄の永楽銭だ。この辺りでは、一枚で鑊銭数枚分の価値はある。

くそお……。やられた！

甚助は地面に放り出された火矢を掴むと、きりきりと引き絞る。ひよお……。と火矢は空中を飛んで屋根に突き刺さる。

途端に、乾ききっていた藁屋根は、めらめらと燃え上がった。

が、源二は屋根にいなかった。とつくに、退散していたのである。

それを見てとった甚助は、慌てて走り出した。わざと手薄にして

いた北側が心配になってきたのだ。

燃え上がる屋根が、辺りを明るく照らし出している。

裏手に回ると、がらつと音を立て引き戸が開かれた。中から源二が女の手を掴んで飛び出してくる。

間に合った！

甚助は薄く笑った。



## 刃

闇の中から現れた甚助の姿に、源二は立ち止まった。背後の時姫を守って、立ちほだかる。

「甚助！」

怒りをこめ、叫んだ。

「おぬし、何が狙いだ？」

「そのお姫さまだよ」

ゆっくりと甚助は近づいてくる。わざと隙だらけのように見せかけているが、実はその目は油断無く動いている。両手はだらりと体の両側に垂らしていた。

遠くから、わあわあとして源二が撒き散らした銭を取り合うならず者どもの声が聞こえている。

じりっ、じりっ、二人の距離が詰まった。

すらり、と源二は腰の刀を抜き放った。

肉厚の刃で、反りは少なく、直刀に近い。刃は幅広で、切れ味よ、り、多少は打ち合っても折れない強さを求めた形だ。

甚助も自分の刀を抜いた。こちらは三尺近い長さの業物で、反りが強い。細身で、軽く扱いやすいが、相手と切り結ぶような目的では作られていない。

源二は刀の背を自分の左肩に押し当てるようにして構えた。甚助は源二に正面に向き合い、斜に構える。

轟っ、と屋根の炎が熱風を巻き上げる。細かな火玉が、辺りに点

々と転がった。

むん！ と無言の気合を込め、源二がおおきく跳躍した。肩に担ぎ上げた刃を真っ向から振り下ろす。

さつと仰け反るような姿勢で、甚助は寸前で躲す。刀で受けるような馬鹿な真似は絶対しない。細身の刀は、源二の肉厚の刃を受け止めたら、一撃で砕かれてしまうからだ。

さつと源二は横に薙ぎ払った。

す、す、と甚助は軽やかに動いて紙一重に見切って避けていた。

## 啄木鳥

源二の額からは大粒の汗が噴き出していた。

へらっ、と甚助は笑った。

「こう見えても、剣術は得意だね。今度はこちらから行くぜ！」  
無造作にずかずかと歩み寄り、腕を伸ばして突きを入れた。

うつ、と源二は一步後ろへ飛んだ。そこに甚助の第二の突きが殺到した！辛うじて躲した源二だったが、甚助の突きは三度あった。一瞬にして甚助は突きを三回入れていたのだ。啄木鳥の異名の由来である。

源二の目が大きく見開かれた。自分の鳩尾に、甚助の切っ先が食い込んでいる。

むおっ、と源二は大きく喚くと、手にした刀を跳ね上げた。

きいーんっ！

齒の浮くような金属音がして、甚助の刀が真ん中から真っ二つに折れていた。甚助は刀の鎗で跳ね上げたのだ。

くそっ、と甚助は毒づいた。

源二の着物の胸辺りが、大きく切り開かれている。中から鎖帷子が覗いていた。確かに突きは入ったが、鎖帷子に阻まれ、致命傷ではなかった。

折れた刀を投げ捨てると、甚助は一步下がった。

源二の刀を見つめる。源二の刀は、刀というよりは、鉄の棒である。敵の刀を折ることを目的として鍛えられている。

そろそろと甚助は自分の着物の懷に手を入れた。用意の手裏剣が手に触れた。

その時、甚助は源二の様子に気付いた。

ふーっ、ふーっと肩で息をしている。

致命傷ではなかったが、傷は深い。顔色は真っ青で、大量の汗が額から顎に伝い、ぼたぼたと垂れていた。

「歳だな、源二。諦めろ、お姫様はおれが京の都へ連れて行つてやるよ」

うるさい、と源二はつぶやいた。刀を両手で捧げ持つように構える。切っ先が細かく震えている。

時姫が源二の背中にすがりつくようにしている。目が大きく見開かれ、甚助をひた、と見つめていた。

## 源二の死

ほう……、と甚助は微かに声を上げた。  
なるほど、確かに美しい。

「甚助、そやつか？」

闇の中から仲間の声が響く。目の隅でちら、と数人の男たちがやってくるのを、甚助は認めていた。

「ほう、それが時子とかいうお姫様かい？　こりゃ別嬪じゃねえか！」

どこかとは無遠慮に集まってきた、男たちは値踏みするような視線を時姫にあてた。時姫は、きつと男たちの目を見返した。

「無礼者！　下がりや！」

どつと男たちの間に笑い声が上がった。

どお……、と背後の山寺が焼け落ちる。

火の粉がぱつと撒き散らされ、いくつかが男たちの肌にくつついたのか、あちち……という声が上がった。

「おれに任せろ！」

一人が大身の槍を構え、突進した。

穂先を源二は薙ぎ払った。

ぐわん、と槍があさつての方向を向き、突きを入れた男はその勢いに足もとを掬われるようにして倒れこむ。

わっ、と前のめりになるそいつを、源二は真っ向から切り下げた。がつ、といやな音がして、男はうめき声を上げて地面に腹ばいになった。

悶絶している。どこかの骨が折れたのだろう。

源二の驚異の手並みに、男たちの間に怯みが走った。が、それでも多数を待み、取り囲んだ。

男たちの間に素早い目配せが交わされた。気を揃え、一斉に槍が繰り出される。

どすつ、どすつと鈍い音がして、無数の槍の穂先が源二の身体に食い込んだ！

「源二！」

時姫が悲鳴を上げた。

ぐぶつ、と源二の口元から血が溢れた。

くくくく……、とそれでも地面を踏みしめていたが、やがてどうと倒れこむ。

「源二　！」

時姫の声が長々と後を引く。地面に倒れた源二に取りすがり、激しく泣いている。

甚助はふらりと近寄った。

きつと時姫が顔を上げ、甚助の顔を憎々しげに見上げる。

ふつと甚助は視線を外した。その視線が杉木立の闇に向かっていく。

気になるのは、襲撃の前に聞こえた赤ん坊の泣き声であった。

## 産着

闇の中を、三郎太は河童淵に急いでいた。腕には、産着にくるま  
れた息子の時太郎を抱いている。

時太郎は泣きもせず、父の腕に抱かれている。

時姫。  
。

三郎太は悲痛な瞳を、燃え上がっている山寺に向けていた。

ひしひしとした囲みを見て、源二は素早く判断を下したのだ。

「三郎太、それがしは時太郎を守れ！」

え、と顔を上げた三郎太に向かって、源二は早口に説明した。

「姫と時太郎、二人が同時に逃げることは無理じゃ！ それより、  
おぬしが時太郎一人を守り、逃げてくれれば、わしが姫さまを守り  
易い。あとで落ち合う場所を決めておけばよいではないか？ 姫、  
いかがでおわす？」

源二の尋ねに時姫はうなずいた。

「妾は、源二の決定に従いましょう。三郎太殿、どうか時太郎をお  
守りくだされ！」

それで三郎太は河童淵へ急いでいるのだ。

河童淵に辿り着けば、時太郎は安全だ。時太郎を預けて、落ち合  
い場所へ戻るつもりである。

闇の中を飛ぶように駆け、三郎太は一心に河童淵を目指していた。

## 産着（後書き）

『河童戦記』第一部終了です。次は、時太郎の章を予定しています。楽しんで貰えたでしょうか？良かったら、感想など待っています。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4247m/>

---

河童戦記～時姫の章～

2010年10月26日12時50分発行